

賀屋恭安 医案②

予少時、氣 太だ鋭く、議論軒昂、自許甚だ高し。また大いに笑うべきなり。年十九、明倫館に在りて、胡瓜を茹らい、腹痛を発し、臍傍より心胸まで、苦楚 堪うべからず。紫円三分を服すも下らずして吐す。痛み稍く甚だしく、大柴胡湯数劑を服すも便来たらず。続けて大承氣湯二貼を服すに、腹鳴して微嘔し、痛み益々劇し。諸友之を憂い、為に医朱を延く。朱 平胃散を作りて去る。予や已に困憊極まる。湯を進むに及ぶも、頭を掉りて肯んぜず。諸友 慇懃に慰諭し、之を勧めて已まず。予 毅然として曰く、敬は不敏なるも、諸君の末に列し、常に古道を以て標準と為す。医事と雖も亦た当に然るべし。憾むらくは吾が業 未だ精ならず、何方の治すべきかを知らず。死は一なり。寧ろ天数に死すとも、平胃散を服するを欲せず、と。是の日、家君の書至りて曰く、大建中湯を服せよ、と。謹みて命に従い二劑を尽くす。痛み輒ち已み、便利すること二行、幾ばくもなくして瘳ゆ。諸友 其の傲を笑う。